

インド密教における衆生の解脱

松村幸彦（東北大学）

インド密教では、その歴史的展開を区分する方法の一つに初期・中期・後期の三つを用いた仕方がある。初期密教ではマントラやダラニなどの一種の呪文を用いた除災招福を主な目的とする修法がその中心であった。その後の展開において、中期密教では印を結び口ではマントラを唱え、そして特定の尊格やマンダラを観想するという、身口意の三密を用いる実践が整えられた。後期密教では、中期密教で整備された実践を継承しながらも、その内容に性的なヨーガや排泄物の摂取などの今までの大乘仏教では否定されていた要素の導入や、身体の生理学的な側面を用いた観法が説かれた。初期では現世利益を目的としていたが、中期以降の密教ではその目指すところは、密教における究極的な境地、現世での大印の悉地の獲得であった。それと同時に四種法を始めとする悉地の獲得についても密教では説かれている。

後期密教に区分される 8 世後半から 13 世紀頃、密教への入門を志し修行を行い、この世での成就を願う人々は上述のようにこの世での悉地の成就を図って実践に身を投じた。その成就を志す人々に関して、後期密教を代表する聖典の一つである『秘密集会タントラ』では、無間業を始めとする大罪を犯した者や、チャンダーラや竹笛を作る者など殺害による利益をひたすら考えている者たち、好んで嘘をつく者たちなどもこの密教において成就することが出来る、さらには相応しいとも説かれている。同様の記述は、同じく後期密教を代表する聖典である『ヘーヴァジュラタントラ』第二カルパ第四節にも見られる。同タントラでは『ヘーヴァジュラタントラ』に従った実践を行えば上述の者たちでも成就することに疑いはないとも説かれており、これらのことから、タントラ聖典に従った修行を実践すればどんな大罪人であっても解脱、つまりは成就者 (siddha) となることが可能であると考えられていた。後期密教では、その実践階梯として生起次第・究竟次第の二次第が規定されている。生起次第ではマンダラ輪を観想し、その観想したマンダラとの一体化を目的としている。究竟次第では、その生起次第に依拠しつつ、身体の生理学的な部分に焦点を当てた観法を行い大印の悉地の獲得を目指す。つまり、成就者となるためにはこの実践を修することが必要となるため、衆生の解脱を明らかにする上でそれらの実践方法についても見なければならない。

本発表では、『ヘーヴァジュラタントラ』本文とそれに関する諸註釈やその他のタントラ聖典に見られる記述を手掛かりに、密教の実践を行う衆生は一体どんな人々が想定されていたのかを整理・確認する。そしてその上で彼らが実践するように求められていた観想法に関して概観する。それによって、インド密教の中で考えられていた衆生観と彼らが悉地の獲得に向けて行っていた実践の一端を見ることが出来ると思われる。

キーワード：観想法、悉地、ヘーヴァジュラ